

カタクチイワシ *Engraulis japonicus*



口が大きいわりに下アゴが短く、上アゴばかりが目立つことから、「片口」イワシと呼ばれます。高知県内では、仔魚をシラス、幼稚魚をカエリあるいはドロ、成魚をホタレなどと呼びます。本種を「マイワシ」と呼ぶ地域もありますが、正式な名称の「マイワシ」は、県内で一般に「ヒラゴ」と呼ぶ魚のことなので注意が必要です。

生のシラスは「どろめ」、釜揚げシラスは「ちりめんじゃこ」、煮干し品は「いりこ」として用いられます。成魚は生鮮品や干物のほか、カツオ竿釣りの餌としても利用されます。

生物特性

高知県で漁獲されるカタクチイワシは太平洋系群に属し、北海道から九州にいたる沿岸から沖合まで広く分布しています。寿命は4歳に達すると考えられています。満1歳で被鱗体長11cm、2歳で13cm程度に成長します。満1歳で成熟し、冬季を除くほぼ周年産卵しています。本県沿岸域でも卵はほぼ周年採集され、産卵盛期は4～5月です。多くの魚の卵は真円形をしているのに対し、カタクチイワシの卵は楕円形をしているので、容易に識別できます。

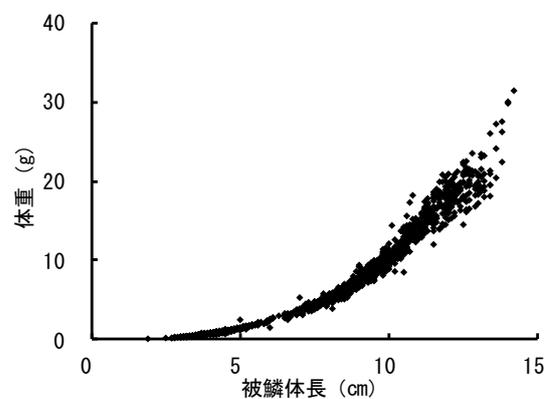


図1 高知県産カタクチイワシの被鱗体長と体重の関係（平成23年～27年の測定データに基づく）。

資源動向

カタクチイワシ太平洋系群の資源量は、平成10年（1998年）以降、高水準にありましたが、平成15年（2003年）をピークとして減少傾向となりました。平成27年の資源量は15万トンと推定されており、平成28年度におけるカタクチイワシ太平洋系群の資源水準は「低位」、動向は「減少」と考えられています。

県内の漁獲動向

高知県内におけるカタクチイワシ漁獲量は、昭和 32 年をピークに減少し、以後は増減しつつほぼ横ばい傾向にあります（図 2）。主に宿毛湾の中型まき網と、県内各地の定置網により漁獲されます。

宿毛湾の中型及び小型まき網では、春から夏を中心に漁獲されます。中型まき網では、冬季はほとんど漁獲されませんが、小型まき網では、小量ながら冬季も漁獲されます。定置網では 1～7 月に漁獲され、ピークは 4 月にあります。また、8 月以降はほとんど漁獲されません（図 3）。

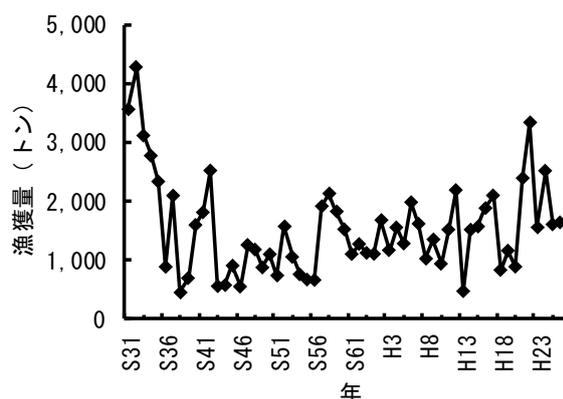


図 2 高知県下におけるカタクチイワシ漁獲量の推移。

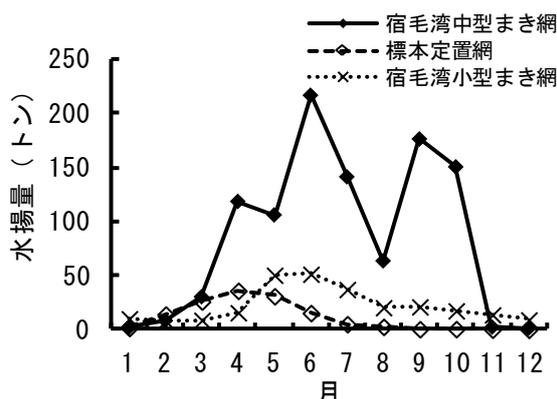


図 3 標本定置網と宿毛湾の中型及び小型まき網によるカタクチイワシの月別水揚量（平成 18～27 年の平均値）。

過去 10 年間の宿毛湾のまき網漁業について、上半期の小型まき網による「かえり」銘柄（鱗ができて間もない小型のカタクチイワシ）の水揚量と、下半期の中型まき網によるカタクチイワシの水揚量との関係を見ると、中型まき網で極端に多獲された平成 24 年を除き、概ね正の相関が認められました。この結果から、宿毛湾に加入してきた小型のカタクチイワシが、その後成長しながら漁獲される傾向が強く、また平成 24 年の事例のように、沖合からの加入により単発的に豊漁となる場合もあると考えられます。

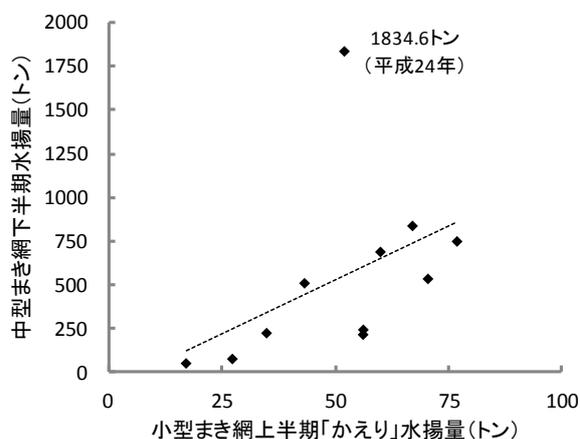


図 4 宿毛湾の小型まき網による「かえり」銘柄の上半期水揚量と、中型まき網による下半期カタクチイワシの水揚量との関係（平成 17～27 年）。